Meisei University

中国の新聞紙面研究についての考察（上）

馬　挺*

目次

第一節　中国の新聞紙面研究の流れと現状
一、新聞全体史における紙面研究
二、新聞断代史における紙面研究
（以上「上」）
三、新聞編集学における紙面研究
第二節　昨今の中国における紙面編集理論
一、紙面と「紙面言語」
二、「強勢（強さ）」・感情とバランス感覚
三、読者心理についての研究

第一節　中国の新聞紙面研究[1]の流れと現状

中国における新聞に関する学問的研究は、日本の松本君平が一八九九年（明治三二年）に出版した『新聞学』を、一九〇三年に中国の商務出版社によって翻訳・出版されたものがその濫觴である。[2]一方中国人が書いた最初の新聞学著作は、一九一九年徐宝璜の『新聞学』であるとされる。その後徐氏の他に黄天鵬、任白濤、邵振青（飄萍）、戈公振、管翼賢氏らによって、新聞学、新聞史に関する翻訳と著作が多数出版された。

中華人民共和国建国以後、しばらくの間は、新聞学に関する有力な著作はほとんどなかった。しかし、一九八〇年代初期に至って、中国人民大学、上海復旦大学などの大学、そして中国社会科学院の教員と学者によって、論文や著作が徐々に発表されていった。

台湾の方であるが、国立政治大学新聞学部と新聞研究所、中国文化学院新聞学部などの学者を中心として、様々に成果を上げている。

また海外の方では、アメリカ国籍の中国系人潘賢模が一九八一年から一九八二年まで、中国社会科学院の『新聞研究資料』で中国の早期新聞について論文を発表した。そして、東京大学新聞研究所（現社会情報研究所）で教鞭をとったことがある卓南生先生による中国の早期新聞についての著作『中国近代新聞成立史』が、一九九〇年に出版された。

日本では、戈公振との面識のある小野秀雄先生の早期論文でも中国の古・近代新聞[3]について論じられており、また小糸忠吾先生は中国の新聞の全体像を描いている。最近の研究成果については山本賢二先生（日本大学）と三好崇一先生の著作と論文を挙げることが出来る。

これらの文献における中国の新聞紙面についての論述は、大きく二つに分けることができる。すなわち、新聞史の分野と新聞編集論の分野であり、また新聞史の分野は全体史と断代史（朝代毎に分けて研究すること）に分けることができると思われる。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

一、新聞全体史における紙面研究

（一）戈公振の『中国報学史』

民国一六年（一九二七年）一一月に上海の商務印書館により出版された『中国報学史』は、中国新聞史の第一作といえるもので、中国の古・近代新聞について詳細に論じており、中国新聞史の研究に不可欠な存在である。その『中国報学史』で戈公振は、「漢代に『邸報』があったか」という点から出発し、「邸報」は中国の古代新聞であるという著名な学説を提起した。そして漢、唐、宋、明、清、民国（一九二〇年代）に至る各時代の新聞を、時代の流れに沿って四つの時期、すなわち、その一「官報時期」、その二「外報創始時期」、その三「民報勃興時期」、その四「新聞経営時期」とに分けて、それぞれの時期の新聞の発生、発展の背景、実情と影響などの各側面から分析を行った。

『中国報学史』の中で挙げられた歴代の新聞紙面の構成について、文字を用いる記述はそれほど詳しくないが、幸い初版の『中国報学史』、すなわち上海の商務印書館の中華民国一六年一一月版には、多数の現物の図版と写しが掲載され、『京報』の表紙の実物を複製するなどの努力が払われたので、歴代の新聞紙面をある程度知ることができる。しかし、最初の近代的中国語新聞と言われる『察世俗毎月統記傳』のような中国新聞史上非常に重要な存在であるいくつかの新聞は、戈公振自身、「若干種は名だけ残っており、実物発見できず、遺憾に思う」[4]と述べている。もちろん、これらの紙面に関する論述は、省略されたり、間接的な資料に基づいていたりと、その信頼性が問われるところである。

実は戈公振は、一九二七年から一九二九年の間に、欧米並びに日本に研究旅行をし、「英国博物館」（原文のまま）で『察世俗毎月統記傳』『特選撮要毎月紀傳』『東西洋考毎月統記傳』などの実物を見ることができ、写真も撮った。本来彼はこれらの新しい資料を加えて、『中国報学史』を口語で書きなおすつもりであったようだが、早逝のため残念ながら実現できなかった。

『中国報学史』が一九五五年に三聯書店によって再版された時と、一九八六年に二回目再版の時の両方とも、戈公振が集めた新資料を加えなかった上に、複製困難と言う理由で全ての図版と写しを省いた。そのため初版の『中国報学史』はすでに貴重な文献になっており、中国の研究者にとって、初期の新聞の顔を知ることは一層困難になったのである。

（二）方漢奇教授と『中国新聞事業通史』など

新中国建国後、国内における中国新聞史研究の第一人者である中国人民大学方漢奇教授が主編とする『中国新聞事業通史』（全三巻）が一九九二から一九九九年にかけて出版された。これは方漢奇教授の『中国近代報刊史』をはじめとして『中国新聞事業簡史』などの中国新聞史における研究成果の集大成といえよう。

『中国近代報刊史』は一九世紀初期から二〇世紀一〇年代までの新聞の発生、発展史で、その特徴は新聞史を社会発展史に基づいて論じたことである。例えば、同書の章題をいくつか見てみると、第三章「中国資産階級新聞の萌芽と資産階級改良派の新聞活動」、第四章「民主革命準備時期の資産階級報刊」、第五章「民主革命ピーク時期の資産階級報刊」などであり、各時期の新聞の社会的背景、内容と観点の傾向、そして果たした社会的役割と影響についての分析を主にしている。しかし各新聞の紙面についての論述はほとんどなく、図版は表紙の裏に十数種の新聞を揃えて重ねて写した写真一ページしか収録されていない。総括的に時

NII-Electronic Library Service

Meisei University

期毎の新聞編集の特徴について述べたときに、紙面の特徴とその変化についての簡単な説明がされている程度で、紙面構成の編集論上の理由やその変化の理由についてはほとんど論じられていない。

『中国新聞事業簡史』の主な内容は、『中国近代報刊史』の続編として、二〇世紀の一〇年代から一九四九年の建国の直前までの新聞事業についてであり、中国共産党系の新聞が主に論じられている。その論述方法は『中国近代報刊史』とあまり変わらないが、新聞紙面についての論述、図版などはほとんどない。

一方、『新聞学論集』（中国人民大学新聞学部）第二輯の中に収められている、方漢奇教授の『辛亥革命時期報刊業務工作的改進』の論文は、同時期の新聞の紙面の変化、欄の設置、そして見出しなどについて詳細に論じたものである。

方漢奇の著作にはまた、『中国古代報紙』（中国古代の新聞）があり、それは一九八〇年代から中国人民大学内部教材として「邸報」『京報』など中国の古代新聞について詳細に述べているが、残念ながら、古代新聞の写しと図版はない。

『中国古代報紙』の中で方漢奇は、『進奏院状』について論じた。この『進奏院状』は、大英図書館に保存されている、一九世紀初頭に敦煌でスタイン（sir Anril Stain）によって盗まれた七千点にのぼる「敦煌巻子」の一点（番号：S一一五六）として発見された唐時代の文書であり、世界に現存する最も古い新聞と言われるものである。しかし、その時点では方漢奇自身も本物を見たことがなかったので、新華通信ロンドン支社の記者に頼んで、『進奏院状』の手書きの写しを入手した。そして、『新聞学論集』第五輯に発表された論文『従不列顛図書館蔵唐帰義軍「進奏院状」看中国古代的報刊』（大英図書館に保管されていた唐帰義軍の「進奏院状」からみた中国古代新聞の歴史）の中で、方漢奇教授はまず『進奏院状』を写した人による本物の外観についての描写を紹介し、さらに原文のままで内容を公表した上で、言葉ごとに詳しい解釈と考察を加えた。この『進奏院状』についての分析を通じて、「邸報」という名称や発生時期、さらには古代新聞と現代新聞の区別について改めて検証したのである。

一九九二年九月に出版された『中国新聞事業通史』の第一巻の内容は、古代から「民国初期」、即ち一九一九年の「五四運動」発生直前まで中国の新聞史を包括した。方漢奇教授の前述の論著などを整理し、当時までの国内外の研究成果も検証・採用されている。

まず、長期にわたって論争してきた中国古代新聞の最初の出現時期について、唐時代からという説は比較的に信用できると結論付けた。さらに、現在、それぞれパリ国立図書館所蔵（唐僖宗乾符年間・八七四～八七九年）と大英図書館所蔵（唐僖宗光啓三年・八八七年）（後者の図版掲載）の二点の手書き新聞『進奏院状』を検証し、現存最古の原始型新聞と断定した。これらは欧州中世のニュースレターと相似するので、紙面編集の視点からの検証はあまり意味がないと思われる。また、後述に触れる日本国会図書館所蔵の乾隆三十六年（一七七一年）『題奏事件』と題した民間発行した印刷新聞を紹介したが、詳しくは検証されなかった。また、後述の卓南生の『中国近代新聞成立史』の一部の研究成果（特に、『香港船頭貨價紙』などについて）を取り入れてある。

しかし、紙面編集の視点からの検証はあまりなく、古代新聞の面貌を窺える図版も意外に少ない。(5)

（三）中国国内におけるその他の研究者の研究

全体史の形で中国の新聞史を研究しているものは、その他に一九八六

NII-Electronic Library Service

Meisei University

図版-1　大英図書館所蔵『進奏院状』（『中国的報刊』より）

年に上海復旦大学新聞学部新聞史研究室によって出された『新聞学基礎教材叢書』の一種の『簡明中国新聞史』がある。また、一九八八年一二月に出版された、中国の一四の大学が合同編著した『中国新聞史（古近代部分）』と、王鳳超（中国社会科学研究所所長）編著『中国的報刊』（中国の新聞雑誌）がある。

『簡明中国新聞史』が記述した範囲は、中国の古代新聞から中華人民共和国建国の直前までであり、基本的に中国の社会発展の段階に沿って、中国の新聞の発生・発展の背景・状況・思想の分析、そして社会的役割をめぐって論じている。その特徴の一つは、新聞史論として初めて、「五四運動」以後の新聞紙を系統的に述べた点である。特に国民党統治の下の新聞や共産党軍隊の新聞についても紹介し、論じているが、史料にしろ分析にしろまだ不十分であると思われる。新聞史でありながら、新聞そのものを歴史的に分析する視点に立っていない印象があり、また新聞編集や紙面についての論議が少ないからである。

『中国新聞史（古近代部分）』については、副題にある通り範囲は「五四運動」直前までである。その考察方法は、新聞史上著名な人物をめぐって、その思想・作品・そして新聞事業と新聞編集の業務を材料として論じたものである。とりわけ、いくつかの重要な新聞の紙面について詳細に記述、考察が行われている。例えば、『察世俗毎月統記傳』の表紙の様子について詳しく記述し、さらに『申報』『新聞報』の紙面構成も詳細に紹介している。

王鳳超の『中国的報刊』は、各時代・時期の代表的な新聞の紹介と分析に絞り、記述の範囲は「邸報」から最近に至るまでである。その中で建国当初の新聞事業と一九七九年からの新聞雑誌の大発展の状況について、新聞の全体史の中で紹介したものはこれが初めてである。もとより二〇万字程度で、膨大な内容を詳細に分析するのは無理があるとはいえ、一九六六年から一九七〇年代の末期までの文化大革命期における新聞史上の空白期を埋めていないのも事実である。しかし、『中国的報刊』が今まで取り上げた他の新聞史の著作と比べて優れている一つの特徴は、その資料性である。多数の新聞の写真図版が掲載され、紙面についての論述は多くないが、歴史上重要ないくつかの文献の面貌が一目瞭然である。例えば、上述の方漢奇教授が紹介した、「世界に現存する最も古い

NII-Electronic Library Service

Meisei University

新聞」と言われる唐時代の『進奏院状』の現物の一部の写真図版（図版一一）も提供しており、方教授の紹介と相補うものとなった。

二、新聞断代史における紙面研究

新聞断代史（朝代毎に分けて研究すること）についてはさらに二つの形式に分けることができると思われる。一つは社会発展史に基づいて新聞史を区別する形で、例を挙げるなら『先秦傳播（メディア）事業概要』（朱傳誉）、『宋代新聞史』（同前書）、『中国明代新聞傳播（メディア）史』（尹韻公）などである。もう一つは新聞あるいは新聞関連事業の発生・発展に沿って、段階的にそれらを研究する形であり、例えば『中国古代報紙探源』（黄卓明）などである。

（一）社会発展史の区分に基づく新聞断代史の研究

1．朱傳誉の『宋代新聞史』について

『宋代新聞史』（中国学術著作奨助委員会・台湾商務出版社、中華民国五六年［一九六七］九月）は、宋時代の「邸報（官報）」・「小報（民営報業）」・「邊報」・「榜文」などの文書について論じ、「邸報」をめぐってその発行機関「都進奏院」の由来及び「邸報」の編集過程と検閲制度、また発行事情について詳細に検証している。特に宋代の「邸報」の名称について、「邸報」「邸状」「報状」「朝報」「進奏院報」「進奏報」「報」「状」を挙げて、それぞれの出典について述べている。「邸報」の内容についても官吏の昇降、大臣の章奏（上奏文）、詔令、朝見と朝辞（皇帝との対面挨拶）、謝表（地方官吏の皇帝への挨拶文）、刑獄、詩文などを挙げて、詳しく考察している。しかし、「邸報」の実物がないので、その紙面については論じていない。

2．尹韻公の『中国明代新聞傳播史』

『中国明代新聞傳播史』は、方漢奇教授の指導による尹韻公の博士論文である。その内容は題目にある「新聞傳播（メディア）史」で、明代の「邸報」と『塘報』以外にその時代の「布告」と世論も含まれている。「邸報」と『塘報』についての考察と分析は、その性格・発行機関・制度・内容・印刷・読者層などの問題に集中しており、紙面編集についての論述は僅かで、しかもその結論は「毫無特色、千篇一律（特色なし、全部同じである）」である。

しかし、明朝の新聞の印刷に関するいくつかの問題について、尹韻公はユニークな論点を提出している。

まず、木版彫版がすでに盛んであった明時代に、当時の新聞と言われる「邸報」が何故広く印刷されなかったかについて、尹は歴史文献に基づき、当時「邸報」を彫版印刷することは珍しくなかったが、普通の「邸報」はまだ手書きで写されており、発行人に新聞価値が高いと判断された「邸報」しか附梓されなかった。それは採算が合わないためであると述べている。

また、粘土によって作られた「泥活字」の印刷方法は、早くも北宋の慶歴（一〇四一～一〇四八）年間に畢昇という人物によって発明された。彫版印刷より活字印刷のほうがコストも低く、印刷周期も節約できた。それが何故五〇〇年も経た明時代に至っても普及しなかったのか、なぜ活字によって「邸報」を印刷した記録も、書籍を印刷した記録もなかったのかという疑問について、尹は次のように判断している。すなわち、粘土のかたまりを彫って活字にして、焼いたあとに印刷するという発想はすばらしいものだが、そうして作られた粘土活字は焼成後、陶器の状

NII-Electronic Library Service

Meisei University

態になっても煉瓦の状態になっても、変形しやすく壊れやすい。しかも中国の伝統的な墨を使って書物を印刷するのは明らかに困難なため、「泥活字」はいつまでも理論と実験の段階にとどまっていた。これが、明時代に泥活字によって印刷された印刷物がない理由である。なお、木の活字については畢昇も試みたようだが、柔らかい木材を選んだためか、失敗した。そこで元時代の王禎は堅い木材を使って、ついに木による活字印刷を成功させた。銅や錫や鉛の金属活字も実験されたようであるが、活字の材料源やその強度、あるいは墨の問題で成功しなかったということである。

明代新聞の印刷問題についての結論は、明時代の技術条件によって、新聞の主流はまだ手書きで、たまに彫板印刷のものがあった。木活字の印刷は明の末期から徐々に始まって、ついに手書き・彫板・活字の三者併存の局面を形成したのであると述べている。

尹韻公の論述は、中国の新聞紙面形成の経緯についての考察の上で非常に重要だと思われる。

（二）新聞事業自身の発展の流れを踏まえた新聞断代史

この新聞事業自身の断代史の研究方法は、上述のような社会発展史による断代の研究と異なって、新聞事業を社会発展の流れやある政治的変動に属するものとして考察するわけでなく、新聞事業を相対的に独立した研究対象と見て研究の主体にしている点である。このような研究の代表作として、黄卓明の『中国古代報紙探源』と卓南生の『中国近代新聞成立史』を挙げたいと思う。

1．黄卓明の『中国古代報紙探源』

黄卓明は長期にわたって中国の古代新聞に関する資料を収集して研究を行ったが、『中国古代報紙探源』は、その研究成果の全貌が見える著作といえよう。『中国古代報紙探源』の書名を見ると、「新聞事業自身の発展の流れを踏まえた新聞断代史」ではないように思われるが、内容を検証すれば、実は萌芽期の中国新聞、つまり古代の原始型の新聞を論じたものであり、ちょうど卓南生の『中国近代新聞成立史』の前の時期をカバーしているので、ここに組み入れようと思う。

『中国古代報紙探源』は史論の体裁になっておらず、一つ一つの問題を取り上げて一連の論文を組み立てている。しかし、漢時代の「邸報」の存在問題から、清時代の『京報』まで、萌芽期の中国の新聞に関する重要問題をほとんど残さず論じているので、萌芽期の新聞の断代史と見ても良いと思われる。

同書はまず、中国の古代に長期に存在していた発行物の特徴を検証し、古代新聞は「官文書」を伝達しながら、原始形態の新聞の性格を持つと指摘している。その特徴は――

・官文書の伝達以外に朝廷政事の動向を報道する
・定期的に、あるいは毎日発行する
・同じ内容を一定の伝達システムを通じて伝達しており、かならずしも下向けの「官文書」ではない
・主に朝廷が主催しているが、そうではない例もある
・朝廷が主催しない場合には、内容は朝廷の「官文書」を超え、一定の料金を徴収した例もある
・内容は朝廷の「官文書」を超えていないが、民間が経営して発売した例もある

などをあげる。すなわち、「官文書」と区別されて、原始形態新聞としての条件をそろえている。

そして、中国古代新聞の呼び方について、新聞学界は「邸報」を『京

NII-Electronic Library Service

Meisei University

報』以前の新聞類発行物の総称か代称として使用しているが、黄卓明の考察では、実際に「邸報」という言い方が最初に現れたのは宋時代である。『進奏院状報』の一つの支流、つまり『進奏院状報』を次々に写す過程の中で生まれたものであり、また「邸報」が総称として使われるのは明時代であるべきだと黄卓明は指摘している。

また、宋代の「邸報」が印刷されていたかどうかについて、黄卓明は印刷されていた証拠が足りず、手書きで写されていた可能性が高いと判断した。これは朱傳誉が『宋代新聞史』で、宋代「邸報」は印刷を主にしていたと結論しているのと異なっている。[6]

『中国古代報紙探源』は、その文中に関連資料を大量に原文のまま引用し、かつ著者の自らの『京報』についてのインタビューと調査の記録もあり、その資料性が優れているため、本稿とりわけ萌芽期の新聞についての検証にとって示唆が多いと思う。

2. 卓南生の『中国近代新聞成立史』

日本語で書かれたこの『中国近代新聞成立史』は、一八一五年から一八七四年の六十年間にわたった中国語の新聞を「『近代型』中国語新聞」と名付けて、その発生・形成の過程と背景、そして発展の接続関係を考察して、さまざまな問題を究明している。

この著作にはいくつかの際立った特色が見られる。

特色その一、中国新聞史の研究における新しい視点である。

いままでの中国新聞史における著作は全体史にしろ断代史にしろ、新聞史を社会発展史の流れによって、段階を区切っているものが多い。例えば、『簡明中国新聞史』の目次は、

「辛亥革命前後の新聞事業」／「五四時期の新聞事業」／「中国共産等成立初期と大革命時期の初期事業」／「十年内戦時期の新聞事業」／「抗日戦争時期の新聞事業」／「解放戦争時期の新聞事業」

がある。

断代新聞史については、前文に触れた『宋代新聞史』と『中国明代新聞傳播史』がある。これらの目次とタイトルや書名を見ると、中国の新聞事業を中国歴史上の朝代あるいは社会発展時期によって段階的に分けて論じていることが分かる。いうまでもなく新聞は、社会発展の流れと非常に緊密な関係にあり、社会発展に影響したり、されたりしているのは確かであるが、しかし、新聞あるいは新聞事業の内在的要因によるそれ自体の発展の流れという存在も否定できないと思われる。したがって新聞事業自体の歴史を研究し、その流れを研究のメインラインに置き、自身の流れによって新聞事業の史的な段階を区切ることもできる。すなわち、新聞事業自身に注目する視点からの全体史と断代史の研究もまた必要だと思われる。

中国最初の新聞史の著者である戈公振の、『中国報学史』は、新聞事業を中心として考察した全体史と言えよう。戈公振は中国の新聞事業史を「官報」「外報創始」「民報勃興」「新聞経営」の四つの時期に分けて研究したのであるが、このような分け方に対する批判もある。例えば、『宋代新聞史』の著者朱傳誉は、これは事実を誤っており、宋代にも民営報業はすでに発達していたと指摘している。[7]

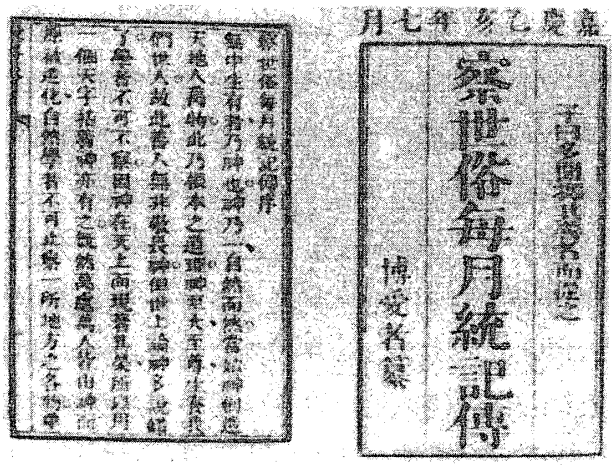
卓南生の『中国近代新聞成立史』の目次（一部）は次の通りである。

一九世紀初期華字発行物発生の背景／新教と最初の華字月刊紙『察世俗毎月統記傳』の誕生／アヘン戦争までの『東西洋考毎月統記傳』を中心としての諸月刊紙について／中国人により成功した最初の華字日刊紙『循環日報』

著者は、中国語新聞の発生の背景分析をベースとして、最初の中国語

NII-Electronic Library Service

Meisei University



図版-2 『察世俗每月統記傳』（『中国新聞事業通史』第一巻より転用）

の新聞から、「成立史」におけるいくつかの重要な新聞それ自体をめぐって詳細に考察し、それぞれの新聞の内在的要素に重点をおいて、新しい視点からの分析を行っている。

このような中国新聞史自身の展開過程、すなわち、成立期の前に、おそらく萌芽期があり、成立期に続いて、成長期と充実期があるという全体構造についての分析を、中国新聞史研究のもう一つの側面として補足していくことは十分に意義のあることと思われる。

特色その二、大量貴重な原資料を掘り出した上での厳密な実証的研究である。

それまで中国新聞史研究において論じられていた早期新聞の中のいくつかは、言ってみれば幻のような存在であった。上述の最初の中国語新聞といわれる『察世俗每月統記傳』（図版―二）について、戈公振は『中国報学史』[8]の中で、これは「最早」の中国語新聞であると論じているが、その実物、あるいは写真などの写しを直接みてはいないと思われる。その内容の引用も、『Chinese Repository』にある原文の中国語から訳した英文をもう一度中国語に訳したものであった。[9]前述のように戈氏は『中国報学史』を出版した後、大英図書館で得た『察世俗每月統記傳』などの写真や写しの内容を、ついに公表できなかった。そのためその後の新聞史研究者たちは、『察世俗每月統記傳』を論じるとき、ほとんど戈氏が『中国報学史』で論じた範囲を越えることができなかった。台湾の学者曾虚白が、民国五五年（一九六六年）四月に出版した『中国新聞史』の中で、『察世俗每月統記傳』の表紙と中身の写しを一点ずつ掲載し、同紙の紙面構成も論じた。しかし、周知の原因のため、長期のわたって中国大陸でこの本を見ることはできなかった。

卓南生は『中国近代新聞成立史』の中で、大英図書館所蔵『察世俗每月統記傳』によって、その創刊序文から、宗教宣伝の文章・西洋知識の紹介・貧困者に寄付した人に感謝を表す記事などまでを原文のままで引用したうえ、同紙の内容・特徴・編集者の姿勢を分析した。それによってやっとこの中国新聞史上の重大な存在の全貌をうかがうことができたのである。

また、中国での最初の中国語日刊紙と言われた香港『中外新報』について、戈公振の『中国報学史』商務版に掲載された紙面の写真は、創刊から五〇年以上も経った一九一二年のものであり、[10]創刊時の『中外新報』の様子は戈氏も「不明」と述べている。

卓南生はこの疑問を解決するために、世界中で当時の原物を探すことに懸命であった。一八七二年五月四日（同治一一年壬申三月二七日）『香港中外新報』がイギリスのケンブリッジ大学図書館で発見された。これに他の資料を加えて、卓南生は戈公振の『香港中外新報』を一八五八年創刊とする説は大体正確であることを裏付ける（厳密に言えば、創刊は　一八五七年十一月三日）とともに、それらに関するいくつかの誤謬も訂正したのである。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

また、小野秀雄先生の研究のヒントを受けて、卓南生は『香港中外新報』の前身と推定される『香港船頭貨價紙』という発行物の存在を確認しようとして、アメリカのエセックス研究所図書館で、一八五九年の『香港船頭貨價紙』七十八部を発見した。そしてその発見された『香港船頭貨價紙』と『香港中外新報』は両方ともに英字新聞『孖剌報』(『The Daily Press』)の「中文(中国語)版」であることを推定した。また両者の日付などの要素に基づいて推算した結果、創刊時期はほとんど同じとみて、当時『The Daily Press(「孖剌報」)』のような一つの英字新聞が、同時に週三回同じ曜日に二つの同じ内容の中国語新聞を発行することは、条件からみても、必要性からみても、考えられないという判断で、卓南生は『香港船頭貨價紙』は『香港中外新報』の前身と断定した。また、紙面構成についての考察によって、『香港船頭貨價紙』は中国初の新聞用紙を両面印刷する近代的中国語新聞であるとの結論が出されて、中国新聞紙紙面研究上の重要な空白が埋められた。

なお、『The China Mail』の中国語ページの『中外新聞七日報』は『香港華字日報』の前身であることも原物を証拠として確認した。

特色その三、確実な証拠と厳密な推理によって、中国新聞史上のいくつかの定説の誤謬を直し、疑問を解決した。

特色その二ですでに指摘したように、戈公振の書いた『中国報学史』の中にあるいくつかの判断や結論は、根拠が十分でなく、誤謬があるものも存在したと言えよう。だが、戈公振は中国新聞史の第一人者とされたため、その後の研究者たちはほとんど彼の述べたことを疑おうともしなかったのである。そして間違いがそのまま次々と伝えられた。

しかし、例えば、『察世俗毎月統記傳』という発行物の題名の文字について、戈公振が『中国報学史』の中で取り上げたとき、「統記傳」の「記」は「紀」となっていたが[11]、その原因が、戈公振は『特選撮要毎月紀傳』の発行者メドハースト(『察世俗毎月統記傳』の編集者のミルンの助手)の回想録に『察世俗毎月統紀傳』と書かれていて、しかも原物を見たことがなかったからであると推測できる。方漢奇教授の『中国近代報刊史』にも間違いがあって、『察世俗毎月統紀傳』と記載されている。卓南生氏は、大英図書館所蔵『察世俗毎月統記傳』の原物に基づいて、その間違いを指摘したわけである。

さらにいくつかのより重要な訂正がある。

まず、『香港船頭貨價紙』と『香港中外新報』について

①戈公振の『中外新報』は「最初隔日刊だったがまもなく日刊に改められ」[12]たと判断した。卓南生が発見した一八七二年五月四日の『香港中外新報』のタイトルの側に「一三五行情紙、二四六新聞紙」の文があった。また同日付二面の「本館謹啓」の内容によって、さらに香港政庁が毎年発行している青書(Hong Kong Blue Book)一八七三年版に記述された一八七三年『孖剌報』の中国版に関する内容を傍証として、『香港中外新報』は「まもなく日刊に改められ」という判断が誤謬であることが判明した。正確な事実は、その本紙すなわち「新聞紙」は始めは週三回火木土に発行し、商業ニュース(所謂「行情」)を付随掲載し、月水金に単独の「行情紙」だけを発行していたが、一八七二年五月四日以降、改めて「行情紙」を『香港中外新報』から独立させ、毎日(日曜除外)発行したとするのが正確である。したがって『香港中外新報』の本紙が日刊紙に変わるのは、創刊から「まもなく」ではなく、十四、五年後の一八七三年のことであった。

②戈公振が述べた「『孖剌報』の(中国語)副刊」の『香港新聞』[13]は実際には存在しなかった。『中国報学史』商務版第三章の第四頁と五頁

NII-Electronic Library Service

Meisei University

の間の図版に載せた『香港新聞』の写真は、実は『香港船頭貨價紙』を「中文原書」にした中国語のままの日本『官版香港新聞』である。

③英字新聞『孖剌報』(The Daily Prees)の中国語版が創刊された背景について、戈氏は『中国報学史』商務版第三章で、「『孖剌報』は中英字典を印刷するため、中国語の活字一セットを購入し、そして伍廷芳の提案で、中国語版の新聞を付けることになり、伍を招聘してそれを担当させた」と論じたが、卓南生はまず『香港船頭貨價紙』の創刊当時は伍はまだ十五歳の少年で、このような提案をしたとしても、『孖剌報』のオーナーのマロウが彼を簡単に信用したかは疑問であるとして伍提案と担当説について否定的な見解を示した。

さらに、卓南生は中国初期の英字紙の発展と香港の特殊な地位、そしてマロウという人物をめぐって考察し、マロウが新聞を発行した目的は「金儲け以外の何物でもなかった」と指摘した。すなわち、中国語版は英字の『孖剌報』の創刊の一カ月後に早くも創刊されたという事実によって、マロウには当初から中国語新聞の創刊計画があり、勃興しつつある中国商人階層の需要に合わせたことが創刊の主な動機であったと考えたのである。

次に、『香港華字日報』の創刊をめぐって

香港で最も早い時期に創刊された三大中国語新聞の『香港華字日報』の創刊年について、戈公振は「同治三、四年(一八六四～一八六五)の間」と述べ[14]、一九三四に出版された『華字日報七十一周年紀念刊』では「同治三年(一八六四)」と主張して、読者から提供された現存の最も初期の同治癸酉五月初十(一八七三年六月四日)付けの紙面写真を収録した。後者の根拠は、『香港華字日報』の主筆であった陳靄亭の甥である陳止瀾(同紙の第三代目の責任者)が言った「我が新聞は清同治三年・甲子(一八六四年)に創刊」によるものであった。中国の新聞史学者は、ほぼこの一八六四年創刊説を踏襲しており、新聞史学界の定説になっていたようである。しかし、欧米の一部の学者は一八七二年創刊説を主張していたが、根拠は具体的に説明されていなかった。

ところが卓南生はこの疑問を解明した。そのきっかけとなったのは、まさに上述の『華字日報七十一周年紀念刊』に掲載された一八七三年六月四日の紙面写真であった。そこでは日付の側に「第一百七十六号No.一七六」と明記されている。また、『香港華字日報』の親新聞である英字紙『The China Mail』(中国名『徳臣報』)は同紙に一八七二年四月～五月に「中国語新聞」創刊の広告を掲載し、週三回発行と編集長は経験豊富な陳靄亭であると明記した。しかも同年四月十九日に、『香港華字日報』はすでに前の水曜日(すなわち四月十七日)に創刊されたと通告していたのである。

一八七二年四月十七日から(週三回で)計算すると、上述の一八七三年六月四日『香港華字日報』に書かれた「第一百七十六号」まで、わずかに二号足りない。休刊もありうることなどを考えると、互いにぴったり合っていると考えて差支えないと思われる。

また、香港政庁の一八六三年～一八七二年の青書に、関連する記載がなく、一八七三年に『The Hong Kong Chinese Mail』(すなわち『香港華字日報』)が記載され、しかも「thrice a week」(週三回発行)と注記され、翌年一八七四年の青書に、一八七三年同紙は「Daily」と記載されている。

結論としては、『香港華字日報』の創刊日は一八七二年四月十七日であり、その前身『中外新聞七日報』(英字『The China Mail』の中国語ニュースページとして一八七一年三月十一日～一八七二年四月六日の間

NII-Electronic Library Service

Meisei University

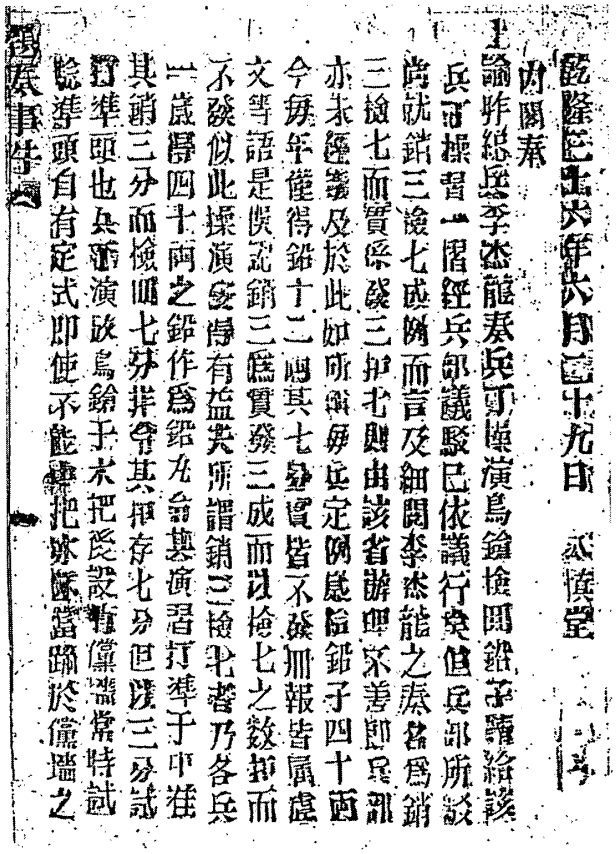
に存在した）の存在期間を加えても、実際の創刊年は一八七一年であり、戈公振の「一八六四～一八六五年間」でもなく、『華字日報七十一周年紀念刊』の一八六四年でもなく、それより七年ないし八年あとのことである。

卓南生の『香港華字日報』をめぐる考証は、『中国近代新聞成立史』（一九九〇年出版）の第八章として収載されるまえに、すでに一九八五年秋季号の『総合ジャーナリズム研究』で「『香港華字日報』の創刊年をめぐって」の題名のもとに発表された。中国の国内では一九八八年に出版された『中国新聞史（古近代部分）』がすでにこの成果を採用したようである。[15] しかし、一九八九年出版された『簡明中国新聞史』は、まだ「一八六四年創刊した『華字日報』」と間違った記述をしている。

特色その四、大量の図版を載せて、昔の新聞の紙面を写し、読者に提示した。

上述のように、いままでの中国新聞史に関する著作は、戈公振の『中国報学史』一九二七年商務版と王鳳超氏の『中国的報刊』（一九八八年）、そして台湾の曾虚白の『中国新聞史』（一九六六年）を除けば、論じた新聞の図版をほとんど掲載していなかった。特に、普通見ることのできない昔の新聞の紙面構成について原物を描写することは少なく、あったとしても、著者の言葉による説明と読者の理解は必ずしも一致するとは言えない。その描写を読んでも要領を得られないこともある。図版が採用されなかった原因は、著者自身も原物を見たことがないか、あるいは写しの入手が難しかったか、あったとしても印刷の製版の難しさを恐れてのことであろう。

卓南生の『中国近代新聞成立史』は本文部分において、四十八ページで延べ六十二点の新聞紙面の全貌あるいは局部の写しを載せ、また、付録として、論じられたいくつかの新聞の序文・前文を原物のままの写しで延べ十八頁も載せている。例えば、最初の近代中国語新聞と言われる『察世俗毎月統記傳』について、当該書が出版された時点までに、中国国内で出版された中国新聞史の著作は、戈公振の『中国報学史』から最近まで（曾虚白『中国新聞史』の二点を除く）その紙面の写真や写しを載せることはほとんどなかった。『中国近代新聞成立史』は『察世俗毎月統記傳』の表紙と中身の内容の写しを十点も掲載した。表紙の下に、判型と所蔵場所も記載されている。なお、卓南生によって発見された、中国新聞史研究にとって非常に貴重な資料である、現存する最も古い『香港中外新報』とその前身『香港船頭貨價紙』のいくつかの紙面の



付図　乾隆三十六年（1771）六月二十九日付け
「題奏事件」の複写　（日本国立国会図書館所蔵）

図版-3 『題奏事件』（筆者提供）

NII-Electronic Library Service

Meisei University

写しも載せている。『中国近代新聞成立史』で重点的に論じた十一種の中国語の早期新聞は、原物をまだ見つけていない『天下新聞』を除いて、残る十種の写しがすべて採用されている。

こうして、卓南生の『中国近代新聞成立史』の研究成果は史実検証の理解と信頼性を高める上に役に立つばかりではなく、研究者にとっても信頼できる資料を提供してくれた。これはまた中国語の新聞紙面に関する考察にとって、とりわけ新聞成立期における紙面の小冊子の形から西洋型の新聞紙の形に変換する流れについての考察にとって、示唆の多いものである。

3．筆者の中国最古の印刷新聞についての考察

一九九一から一九九三年にかけて、筆者は日本国立国会図書館、東京大学東洋文化研究所、中国北京図書館（現国家図書館）と中国の蔵書家個人から、『題奏事件』という文献九三日分の所在を確認し、写しをいただいた。日本マス・コミュニケーション学会（一九九三年春季）で報告した上で、「中国最古の印刷新聞『題奏事件』について」と題する論文を学会誌[16]に発表した[17]。

拙稿は『題奏事件』が今まで発見されている最も古い中国古代印刷日刊紙であることを検証した上で、紙面の複写の一頁を初めて掲載した（図版一三）。また、『題奏事件』のタイトルの意味を吟味し、内容の輪郭を紹介した。そして、その用紙・寸法・印刷・装丁の状態を紹介して、発行対象・速報性・編集手法・紙面構成などの新聞として性格の面から分析を加えた。

（続く）

注

（1）紙面は、中国語で「版面」といい、鄭興東は「新聞における意味は各種内容の配列と構造の全体的表現形式である（『報紙編輯学』一九一頁）」と意義づけている。紙面での編集作業については、従来二つの解釈があり、一つは紙面の配列を指し、もう一つは原稿の取捨選択や見出しの作成も含まれているが、鄭興東の『試論版面語言』では、前者の解釈を選んでいる（『新聞学論集』第一輯四九頁）。本稿も紙面の配列、構成を主な内容として「紙面」という言葉を使う。

（2）『簡明中国新聞史』一八七頁より。

（3）本稿の「古代」というのは中国の慣習に沿って「多指十九世紀中叶以前（だいたい十九世紀半ば以前を指す）（『現代漢語詞典』「古代」条・商務印書館・一九八四年）」である。

（4）『中国報学史』三聯版三五六頁より。

（5）掲載されているのは『敦煌進奏院状』『京報』『察世俗毎月統記傳』『東西洋考毎月統記傳』の何点かの写真図版のみ。

（6）『宋代新聞史』四頁に詳細。

（7）『中国新聞事業研究論集』九二頁に詳細。

（8）『中国報学史』商務版第三章一頁

（9）同前　第九頁

（10）同前　第十頁

（11）同前　第十頁

（12）同前　第十頁

（13）同前　第五頁

（14）同前　第十一頁

（15）『中国新聞史（古近代部分）』一二三～一二四頁

（16）『日本マス・コミュニケーション研究』四三号に参照してください。

（17）方漢奇教授は一九八九年に『東瀛訪報記（上）』（『新聞研究資料』総四十六輯）に日本国会図書館の所蔵分について報告されているが、その他は著者がはじめて報告したものである。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

参考文献

中国語文献

戈公振『中国報学史』（商務印書館・上海・民国十六年［一九二七年］）
徐宝『新聞学綱要』（上海聯合書店・上海・一九三〇年）
任白濤『応用新聞学』（亜東図書館・上海・一九二八）
周孝庵『最新実験新聞学』（上海時事新報社・上海・民国十九年［一九三〇年］再版）
黄天鵬『中国新聞事業』（上海聯合書店・上海・一九三〇年）
同『新聞学刊』（光華書局・上海・一九三〇年）
天廬主人（黄天鵬）『天廬談報』（光華書局・上海・一九三〇年）
管翼賢纂修『新聞学集成』（中華新聞学院・北京・一九三〇年）
方漢奇『中国近代報刊史』（山西人民出版社・太原・一九八一年）
同『東瀛訪報記（上）』（〈新聞研究資料〉総四十六輯・一九八九年）
方漢奇等『中国新聞事業簡史』（中国人民大学出版社・北京・一九八三年）
方漢奇主編『中国新聞事業通史・第一巻』（中国人民大学出版社・一九九二年）
黄卓明『中国古代報紙探源』（人民日報出版社・北京・一九八三年）
中国人民大学新聞系編『中国近代報刊史参考資料　上・下』（校内用書・一九八二年）
復旦大学新聞系新聞史教研室『簡明中国新聞史』（福建人民出版社・福州・一九八六年）
王洪祥主編『中国新聞史（古近代部分）』（十四所大学合編・中央民族学院出版社・北京・一九八六年）
頼光臨『中国近代報人与報業』（台湾商務印書館・台北・民国六九年［一九八〇年］）
曾虚白『中国新聞史』（三民書店・台北・民国七三年版［一九八〇年］）
朱傳誉『先秦唐宋明清傳播事業論集』（台湾商務印書館・台北・民国七七年［一九八八年］）
同『中国新聞事業研究論集』（台湾商務印書館・台北・民国七七年［一九八八年］）
同『宋代新聞史』（中国学術著作奨助委員会・台湾商務出版社・台北・中華民国五六年［一九六七年］）
同『報人・報史・報学』（台湾商務印書館・台北・民国六十年［一九七一年］第三版）
方積根等『海外華文報刊的歴史与現状』（新華出版社・北京・一九八八年）
鄭貞銘『新聞採訪与編輯』（三民書店・台北・民国七九年［一九九〇年］）
鄭興東等『報紙編輯学・修訂版』（中国人民大学出版社・北京・一九八八年）
王鳳超『中国的報刊』（人民出版社・北京・一九八八年）
史和・姚福申等『中国近代報刊名録』（福建人民出版社・福州・一九九一年）

日本語文献

小野秀雄『内外新聞史』（日本新聞協会・一九六一年）
同『飜刻新聞雑誌の原書について』（『新聞学評論』・一九五二年）
卓南生『中国近代新聞成立史』（ぺりかん社・一九九〇年）
同『官板華字新聞および中国語原紙について』（『日本初期新聞全集』ぺりかん社・一九八六年）
同『解題「遐邇貫珍」「六合叢談」「中外新報」「中外襍誌」「香港新聞」』（同右）
小糸忠吾『ニュースの源流――中国の新聞千二百年』（教育社・一九八五年）
三好崇一『中国の新聞の特色』（上智大学『コミュニケーション研究』十四号・一九八四年）
春原昭彦『「邸報」について方漢奇教授に聞く』（同上誌　十八号・一九八八年）
足立利雄・三沢玲爾『中国報紙（新聞）史研究（Ⅰ）』（『関西大学社会学部紀要』第十三巻　第一号　昭和五六年［一九八一年］）
同「中国報紙（新聞）史研究（Ⅱ）」（同上誌・第十五巻　第一号）
拙稿『中国最古の印刷新聞「題奏事件」について』・『マス・コミュニケーション研究』四三号・一一七～一三一頁

NII-Electronic Library Service